

「弘法大師と密教美術展」

弘法大師空海は、宝亀5年(774)、讃岐国多度郡(普通寺市)で生まれた。幼名は眞魚。父は佐伯氏、母は阿刀氏の出であった。佐伯氏は讃岐の名族であり、母方の叔父には高名な儒学者阿刀大足がいた。延暦7年(788)、15歳のとき、大師は長岡京にのぼり、大足に就いて儒学を学んだのち、同10年に大学に入った。また、この年、ある僧から虚空蔵求聞持法を受けたといわれるが、これが大師が仏道に接した最初であって、その生涯の方向を決定する重大な転機であったといえよう。やがて大師は官吏養成の機関にすぎなかった当時の大学を去り、土佐室戸崎・伊予石鎚山などを遍歴して修行を積む。

かくして貴重な宗教体験を重ねた大師は、延暦16年(797)、仏門に入る決意を表明する。以後、入唐までの7年間は、表面上は目立った活動が認められないが、おそらく仏道に対する厳しい修行時代であり、将来の飛躍のための準備の時代であったと想像される。

大師が東大寺戒壇院において具足戒を受け、空海と称するようになったのは、延暦23年、31歳のときである。遣唐使に従っての入唐は、その直後のことであり、このときの使船には奇しくものちの伝教大師最澄も乗船していた。唐の都・長安に到着した弘法大師は、延暦24年(805)、密教の正統を継ぐ恵果阿闍梨を青竜寺を訪ねている。恵果は大師を歓迎し、真言密教の真髓を伝える胎藏界及び金剛界の灌頂(仏の位にのぼることを証明するための密教最高の儀式)を行い、伝法阿闍梨位を授けた。さらに、経典・曼荼羅・仏画・法具などをことごとく与えたという。

大同元年(806)、唐より帰国して後の活躍は目ざましいもので、彼ほどに優れた才能を発揮し、万能の天才ともたたえられた人物は稀というほかあるまい。詩文に秀で、三筆の一人と仰がれ、私立学校「綜芸種智院」の開設、讃岐満濃池の修築などによっても有名なが、とりわけ宗教家として真言密教を我が国に伝えて仏教界を一新した事蹟が、日本文化の形成に根深い影響を与えたことは万人の知るところであろう。美術の方面に限ってみても、真言宗の発展にともない、信仰の対象や修法の用具として優れた絵画・彫刻・書跡・工芸が次々と生み出され、請来品(外国から

持ち帰った経典・仏像・諸道具等)をもあわせて今日、密教美術という大きなジャンルを形成するに至っている。

昭和59年は、弘法大師が承和2年(835)3月21日、高野において入定(入滅)して以来、1150年目にあたる。これに因んで、本館では朝日新聞社との共催で、59年1月5日(木)から2月12日(日)までの間、『弘法大師と密教美術展』を開催する。この特別展は、昨年より京都国立博物館を皮切りに全国5会場を巡回してきたもので、今回の岡山が最終会場となる。出品される資料は、岡山県下はもとより、全国の真言宗寺院に伝来する大師ゆかりの宝物類や、平安・鎌倉時代の代表的な密教美術の名品など144件で、そのうち8割以上が国宝・重要文化財に指定されている。まさに密教美術の粋を集めて大師の偉業をしのぶ画期的な展覧会であり、今後これだけの逸品が一堂にそろふことは再びないと思われる。それ故、できるだけ多くの方々への御来館を得、会場内で展覧される広範な弘法大師の足跡と、深遠な密教美術の精華を通じて、我が国の文化への御理解を深めていただきたいと願う次第である。



弘法大師坐像(六波羅蜜寺蔵)

「弘法大師と密教美術」(岡山会場)の主な出陳物

●国宝 ◎重要文化財

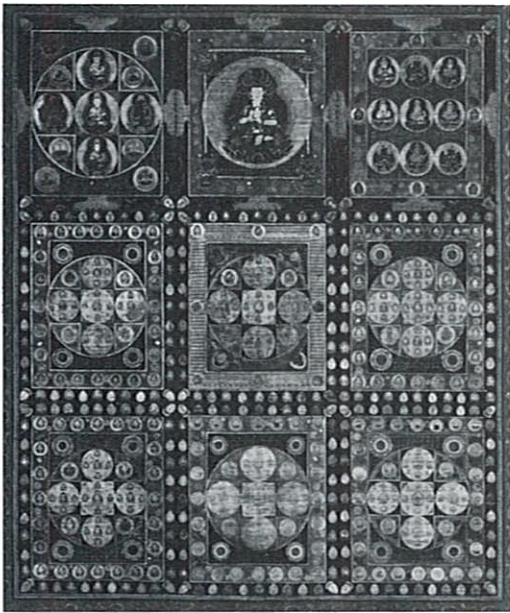
指定	名 称	員数	時 代	所 蔵 者
〔絵画〕	● 恵果像(真言七祖像のうち)	1幅	唐時代	京都・東寺
	● 阿弥陀三尊像	1幅	鎌倉時代 13世紀	和歌山・蓮華三昧院
	● 普賢延命像	1幅	平安時代後期 仁平3(1153)年	広島・持光寺
	● 日天・月天像(十二天像のうち)2幅	2幅	平安時代後期 大治2(1127)年	京都国立博物館
	◎ 弘法大師像	1幅	鎌倉時代 13世紀	和歌山・竜泉院
	◎ 弘法大師像	1幅	鎌倉時代 13世紀	東京・西新井大師総持寺
	◎ 両界曼荼羅図	2幅	鎌倉時代 文保元(1317)年	広島・浄土寺
	◎ 真言八祖像	8幅	鎌倉時代 13世紀	兵庫・浄土寺
	◎ 大日如来像	1幅	鎌倉時代 13世紀	和歌山・金剛峯寺
	◎ 文殊菩薩像	1幅	鎌倉時代 13世紀	徳島・長善寺
	◎ 文殊菩薩像	1幅	鎌倉時代 13世紀	奈良・西大寺
	◎ 五大力菩薩像	1幅	鎌倉時代 13世紀	和歌山・北室院
	◎ 大日金輪像	1幅	鎌倉時代 13世紀	京都・醍醐寺
	〔彫刻〕	● 兜跋毘沙門天立像	1軀	唐時代 9世紀
◎ 弘法大師坐像(長快作)		1軀	鎌倉時代 13世紀	京都・六波羅蜜寺
◎ 真言八祖像(定審作)		3面	鎌倉時代 嘉暦2(1327)年	高知・金剛頂寺
◎ 如意輪観音坐像		1軀	平安時代後期 12世紀	高知・最御崎寺
◎ 金剛夜叉明王像		1軀	平安時代後期 10世紀	京都・醍醐寺
◎ 大威徳明王像		1軀	鎌倉時代 13世紀	京都・大覚寺
◎ 不動明王坐像		1軀	平安時代後期 12世紀	奈良・長谷寺
◎ 金剛薩埵坐像(快慶作)		1軀	鎌倉時代 13世紀	京都・随心院
◎ 大日如来坐像(勸学院安置)		1軀	平安時代後期 12世紀	和歌山・金剛峯寺
◎ 愛染明王坐像		1軀	平安時代後期 12世紀	京都・仁和寺
〔工芸〕	● 金銅錫杖	1柄	唐時代 8世紀	香川・善通寺
	● 俱利迦羅龍蒔絵経箱	1合	平安時代後期 12世紀	奈良・奥院
	● 金銅透彫舍利塔	1基	鎌倉時代 13世紀	奈良・西大寺
	● 宝相華蒔絵宝珠箱	1合	平安時代後期 10世紀	京都・仁和寺
	◎ 胎藏中台八葉院鏡像	1面	平安時代後期 長徳3(997)年	鳥取・三仏寺
	◎ 花蝶蒔絵念珠箱	1合	平安時代後期 12世紀	和歌山・金剛峯寺
	◎ 金銅三昧耶形五鈷鈴	1口	鎌倉時代 13世紀	東京・護国寺
	◎ 金銅五鈷四天王鈴	1口	唐時代 8世紀	香川・弥谷寺
〔書跡〕	● 龔瞽指帰	1巻	平安時代前期 8世紀	和歌山・金剛峯寺
	● 御室相承記	1巻	鎌倉時代 13世紀	京都・仁和寺
	● 大毗盧遮那成仏神変加持経	2巻	奈良時代 天平神護2(766)年	奈良・西大寺
	● 東宝記	1巻	南北朝時代 14世紀	京都・東寺
	● 宝簡集	1巻	平安～桃山時代 12～16世紀	和歌山・金剛峯寺
	● 金銀字一切経(中尊寺経)	1巻	平安時代後期 12世紀	和歌山・金剛峯寺
	● 一字一仏法華経序品	1巻	平安時代前期 9世紀	香川・善通寺
	● 篆隸万象名義	6帖	平安時代後期 永久2(1114)年	京都・高山寺
	◎ 弘法大師伝	1巻	平安時代後期 元暦元(1184)年	愛知・宝生院
	◎ 性霊集	2帖	鎌倉時代 13世紀	京都・醍醐寺
	◎ 金剛頂経	1巻	平安時代前期 9世紀	高知・金剛頂寺
	◎ 随心院文書	1巻	奈良～室町時代 8～15世紀	京都・随心院

県内からの出陳物

◎ 両界曼荼羅図 2幅

英田郡英田町 長福寺蔵
南北朝時代 14世紀

曼荼羅図とは、諸尊を一定の方式によって整然と並び描き、密教の世界観を図示したものである。うち両界曼荼羅は、『大日経』に依拠して現象界の理法を説く胎藏界曼荼羅と、『金剛頂経』に所依して精神界の智的構成を表わす金剛界曼荼羅から成る。長福寺本は、やや疎質な絹を3幅継ぎにして素地とし、彩色を加えたもので、画面の縦長化の傾向、明確な色感、そして諸尊の顔貌がいくぶん神経質な描線である均一的に表現されていることなどから、南北朝時代の作と考えられる。



金剛界曼荼羅図

◎ 五智如来坐像 5軀

邑久郡牛窓町 遍明院蔵
平安時代後期 12世紀

五智如来には、金剛界五仏と胎藏界五仏の二種があり、曼荼羅の構成をみせるのが一般的である。遍明院の一群は、金剛界大日を中心とする五仏を形成しているが、五仏一具の立体的表現の遺例は極めて少なく、貴重である。中尊の大日如来をひとまわり大きく等身とし、他の四仏をやや小さくあらわす。中尊像の面相は丸みがあり、体幹部も太造りであるが、残りの四仏は瘦身・面長となり、両者には若干、作風の違いが認められる。なお、5軀ともにヒノキ材・寄木造、彫眼の漆箔像で、平安後期の作である。



大日如来像

◎ 銅五鈷鈴 1口

和気郡和気町 安養寺蔵
南北朝時代 建武5(1338)年

五鈷鈴とは、密教の修法のとき、諸尊に仏心呼びさます意味で振り鳴らす法具である。

安養寺のそれは、鈴身に紐帯を飾るだけの最も普通の形をとる。鈴身部と把部とは一連の鑄製で、当初は鍍金されていたと思われるが、現状では美しい漆黒色を呈している。口の底面には「備前国新田安養寺了圓之建武五年(1338)三月日」と筆法そのままの刻銘があるが、紀年銘にもかかわらず、その形体には鎌倉時代の特徴が強く遺されている。



◎ 吉祥天立像 1 軀

倉敷市 安養寺蔵
平安時代後期 12世紀



美と富の神である吉祥天の像容は、唐代の貴婦人の姿をとることが多く、また毘沙門天の妃として一対につくられることも時にみられる。安養寺の像もその一例である。体幹部はヒノキ材の一木で彫成し、内刳りを施した構造であるが、撫で肩で穏和な造形、彫りの浅い平板な表情など、12世紀の造立を思わせる。なお、同寺には構造や表現手法の似通った兜跋毘沙門天立像（重文）も伝来している。

◎ 不動明王立像・毘沙門天立像

新見市 三尾寺蔵
鎌倉時代 13世紀

三尾寺の本尊は、千手観音を中尊として、左に不動、右に毘沙門を配した尊像構成であるが、今回、出品されているのは、この両脇侍像である。不動明王・毘沙門天ともにヒノキ材、寄木造の彩色像で、玉眼が嵌入されている。不動の鼻先に力感を集中させていく面貌表現には迫力があり、毘沙門の現実的な表現の面貌には威厳が感じられる。洗練された造形感覚や彫技は県下屈指のものであり、鎌倉彫刻の名品といえよう。



毘沙門天立像

岡山県立博物館だより No.21

発行日 昭和58年12月28日
発行者 岡山県立博物館
館長 早田 憲 治
岡山市後楽園1-5
☎ (0862) 72-1149